

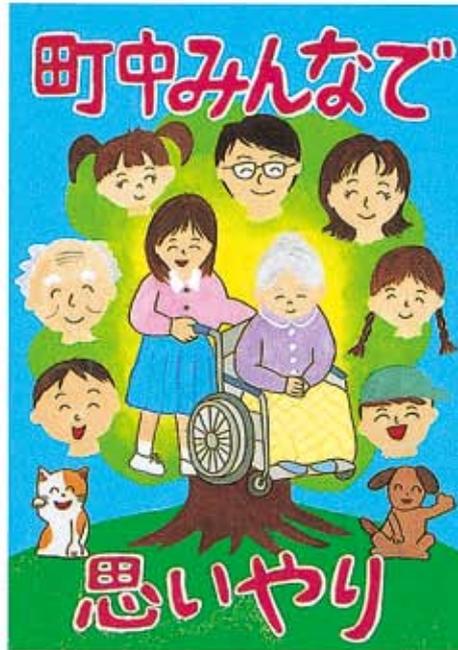


YOKOSHIBA HIKARI

# よこしばひかり



標語  
特選



東陽小学校 6年

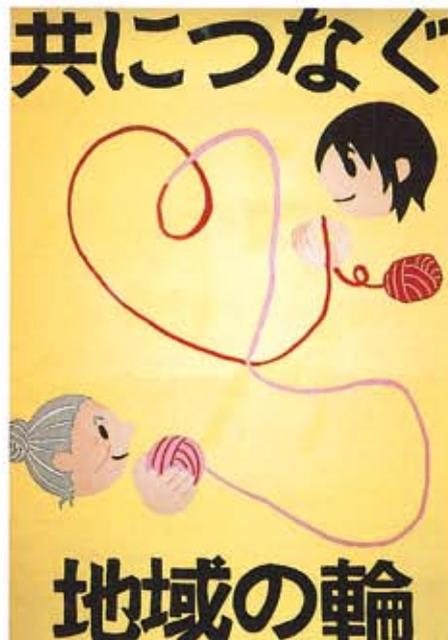
小林 亜里紗

ポスター  
特選



光中学校 3年

高梨 朝子



光中学校 3年

中村 亜紗美

ポスター  
特選



## 第一回 福祉のまちづくり

標語・作文・ポスター入賞作品

奏でよう

人と人との

ハーモニー

## 入賞作品一挙に紹介!

社会福祉協議会では、「ふれあいと支えあえの精神に満ちた心豊かな福祉のまちづくり」を進めるため、福祉教育の一環として町内小・中学校児童・生徒から標語・作文・ポスターを募集したところ、総数468点の作品が寄せられました。

応募いただいた作品の中から、各部門別に特選・入選・佳作の入賞作品が決定しました。  
入賞作品については、11月10日から11月20日まで、図書館に展示しています。

○審査会及び審査員

・標語・作文 10月5日(木)

審査員：伊藤雅美氏・伊橋文枝氏・山辺陽子氏(学識経験者)

・ポスター 10月4日(水)

審査員：各小・中学校教諭

### 作文特選

東陽小学校 6年

平野 綾 佳

## 『心のバトン』

「すごい、こんなにブルタブはいっぱい。」

「たくさんさんの人の協力で、たくさん集められたね。」

「あと、どのくらいで車いすにかえられるのかな?」

咲希さんも、果南さんも、とってもうれしそうに、ブルタブの山を見つめている。学校の昇降口の



ブルタブコーナーには、毎日ブルタブが集まってくる。

わたしがブルタブ集めを始めたのは、五年生のとき、町民会館のポスターが目にとまった。「ブルタブを集めて車いすにかえよう。」という内容だった。

学校の帰り道に、果南さんと咲希さんにそのことを話すと、

「わたしたちで、ブルタブを集めよう。」

と、二人から力強い返事が返ってきた。それぞれの家でブルタブを夢中で集めた。一週間たってみんなを持ちより合わせても、ビニール袋に三分の二位だった。

「こんなんじゃ何年かけても車いすには、変えられないね。何かいい方法を考えよう。」

「うん、どうしたらたくさん集められるかな。」

「学校みんなにもよびかけたらどうかな。」

翌日学校にいき、校長先生や先生方に、ブルタブ集めを全校に呼びかけたいことを話した。校長先生は、にこにこしながら、

「とってもいいことだね。」

と、賛成をしてくださり、いろいろなアドバイスをしていた。ポスターを作ったり、お昼の放送

で流したり、小さな一年生から六年生まで、みんなによくわかって

もらい協力してもらえよう自分たちの思いを一生懸命に伝えた。

「みんなもってきってくれるのかな?」

とっても不安だった。校長先生も学校だよりで、ブルタブ集めについて呼びかけてくださった。数日

後、各学年から、たくさんさんのブルタブが集まってきた。中には、地域のお年寄りの方が、

「学校でブルタブを集めていると聞いて持ってきました。」

と、わざわざ学校にブルタブを届けてくださった。私たちは、お礼の手紙を、その都度、持ってきて下さった人たちに心を込めて書き、届けた。

今は、もっとブルタブの輪は広がり、病院や老人ホームでも集めてくれている。ブルタブ、一つ一つが、その人たちの温かい心のよりに思える。だから、量りにのせる時も、落とさないようにいねいに量っている。車いすに変えるまで、まだまだだが、たくさんさんの心のバトンがつながっているから、きつとブルタブから役に立つ車いすに変えられるときがくることだろう。

この活動を二年間通して、たくさんの人とふれあうことができ、思いやりや感謝の心など大切なことを学ぶことができ、少し成長したように思う。これからも、自分ができることは何かを考え行動していきたいと思う。



南条小学校 2年

霞 海 人

ポスター  
入選

標語 入選

南条小学校 5年

野村 晃 太



## 助けあう 心で作る 福祉の町

作文  
入選

白浜小学校 6年

堀内 尚 輝



### 『よい町を 作るために』

みなさんは「バリアフリー」とは何だか知っていますよね。では「ユニバーサルデザイン」とは何だか知っていますか。ほくは、よい町を作るためにはどうしたらよいか調べている時に、この言葉を見つけました。

「ユニバーサルデザイン」とは、すべての人のためのデザインだということです。老人や障害者、身長の高い人、高い人など、いろいろなたがいますよね。老人には使いやすいけれど、障害者には使いにくい、というのではいけません。すべての人に使いやすいように、わかりやすくしたのが「ユニバーサルデザイン」です。

例えば洗面所のじゃ口です。今までの洗面所は、奥にある取っ手を回さなくてはいけません。今「バリアフリー」では、取っ手を上げたり下げたりするものも見られるようになりました。これが「ユニバーサルデザイン」です。ただ手を差し出すだけで、自動的に水が出てくるのです。ほくも使ってみました。とても便利です。また、洗面所の鏡は、上の方に設置されているものが多いのです。「バリアフリー」では、車いす用に、下の方に設置されます。これでは身長の高い人が映りにくくなってしまいます。「ユニバーサルデザイン」では、鏡を縦長にすることによって、車いすを使っている人でも、身長が高い人でも同じように使うことができます。なるほどと思いました。

「ユニバーサルデザイン」について調べていくうちに、今まで自分には気づかなかったところで、生活に不自由を感じている人がいるということがわかりました。「ユニバーサルデザイン」というものを知ることができてよかったです。

生活に不自由を感じている人た

ちのために、ぼくたちにもできる  
ことがあります。重い物を持って  
あげたり、電車やバスで進んで席  
をゆずったり、歩くのにじやまな  
ものをどかしてあげたり、できる  
ことはたくさんあります。ぼくも、  
電車の中で席をゆずったことがあ  
ります。でも、とても勇気がいり  
ました。ぼくの場合、できるとわ  
かっていても、勇気が出なくてで  
きないことが多いです。

これから、町の中に「ユニバー  
サルデザイン」がもっともっと広  
まるといいと思います。そして、  
ぼくは、小さなことでも自分がで  
きることをやってみる勇気を持っ  
ていきたいと思っています。



ポスター  
入選



上埴小学校 4年

早川 奈々見

標語  
入選

上埴小学校 6年

高田 実歩



## 私の手

# あなたのやくに たちますか

私は五体全部そろっています。  
普通の生活だって、あたり前のよ  
うにしています。けれど、障害者  
は、五体全部そろってない人もい  
れば、そろっていても、大きな病  
気をかかえていて、自由にできな  
い人もいます。  
そんな中でも、とても頑張っ  
ている障害者の中で、私が一番心  
に残っている人は、生まれつき手

八月二十六、二十七日、私は二  
十四時間テレビを見ました。今年  
の二十四時間テレビでは、絆を題  
にした、いろいろなエピソードを  
紹介していました。その中でも、  
障害者の絆がとて心に残ってい  
ます。

## 『絆』



横芝中学校 1年

鵜澤 佳美

作文  
入選

指が左右二本ずつしかなく、足も、ももまでしかありません。子供の時には、鬼や、気持ち悪いなど言われていたけれど、この女性は落ち込むこともなく明るい態度で、「そうよ、私は鬼よ。だから私が鬼になるから、一緒に鬼ごっこをやりましょう。」

と、みんなの中に進んで入っていききました。そんなことは普通の人じゃできないんじゃないかなかなと思います。そんなところに私は、すごいなあ、とずっと思っていたら見ていました。

そして、もう一つすごいなと思ったことがあります。それは、この女性は指が左右二本ずつしかないのに、ピアノをやっているのです。合計四本の指でとても上手にひいていました。私は、合計十本も指があるのに、ピアノなどひけないので、演奏をしているのを見て、とても鳥肌がたちました。

この女性は、小さい頃何も興味をもたなかったそうです。ですが、鍵盤ハーモニカを持たせてみると、だんだん興味をもちはじめたそうです。それからピアノをはじめ、やめたくなくなったこともあったそうですが、お母さんと支えあっ

標語 入選

てきて、今ではピアノが大好きになったそうです。そんな親子の絆に私はとても感動しました。

私の絆は、家族と友達です。私が落ち込んでいる時、友達は、「大丈夫だよ。一緒に頑張ろう。」と、言ってくれます。私が体調が悪い時、家族は、「無理しないで、具合が悪くなったら言ってね。」

と、心配してくれます。相談も、家族に言えない相談を友達にはでき、友達にはできない相談を家族にできます。そんな友達、家族が、私は大好きです。なので、私の絆は、大切な友達と大好きな家族なんだと二十四時間テレビを見て思いました。

これからも、家族と、友達の絆を大切にしていきたいと思います。

日吉小学校 6年

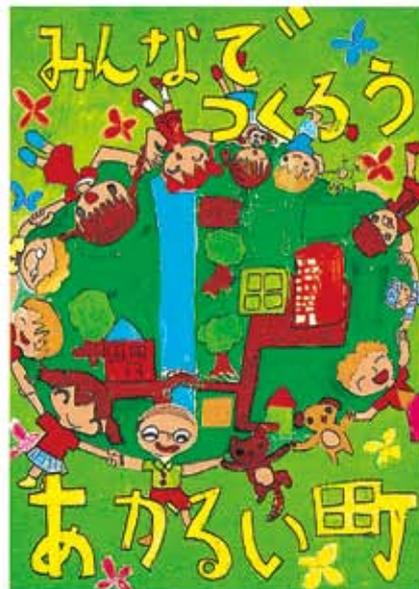
川島一晃

思いやり  
集めてつなぐ

福祉の和



ポスター 入選



白浜小学校 5年

伊藤瑞季



標語 入選

東陽小学校 6年

若梅賢太



さしのべよう  
心のおくの  
やさしい手

作文 佳作

東陽小学校 4年

塩野 真歩

『今できること』

「鳥根のおばあちゃんの家まで、自動車で行ってみよう。」と、母が言いました。

千五百キロメートルのドライブです。途中神戸で一泊しました。そのホテルは、とてもこんでいました。車いすを押ししたおばあさんが、段差で困っていました。母とおばあは、さっと近づき「お手伝いします。」と言って、タイヤの両脇をひよつと持ち上げ下ろすの手伝いました。おばあさんは、何度もお礼を言って出て行きました。私もいっしょに手伝えればよかったと思いました。母は、

「困っている時は、お互いさまだものね。私たちには、何でもなかった一段の段差でも、車いすの方には大きな障害なんだよ。」と、言いました。

私の祖父も足が不自由です。長く歩く時には、車いすを持って行きます。段差があったり、でこぼこしている道は、乗っていても、



おしりは痛いし、とてもこわいそうです。

私も、車いすに乗って押ししてもらいました。でこぼこ道や段差は、ゆれてとてもこわかったので、やさしくしん動のないように押してあげたいと思います。

でも、祖父は、「長く歩くと足が痛くなってしまいうけど、車いすなら買い物も旅行もみんなといっしょのペースで進めるからうれいんだよ。」と、言っていました。

実際に車いすで出かけると、車いすがスムーズに進めるようになると、段差をなくすためにスロープやエレベーターがあったり、駐車場には、障害者用のスペースがあったり障害者の方々にとてもやさしい工夫がされているのを知りました。

横芝光町になって、私たちの町には、どんな福祉があるのか調べてみたくなりました。

駅や役場、図書館には、点字ブロックや障害者用の駐車スペースやスロープがありました。その他にもお年寄りや子供などいろいろな人たちが利用しやすいような工夫がしてありました。利用しに来た足の不自由な方やお年寄り、バギーを押したお母さんは、

「段差の少ないのがうれしい。」と、話していました。これが「一人一人にやさしい町づくり。」の一つだと思いました。

母やおばのようにほんの少し勇気があれば私にもなにかできそう

な気がしました。「四年生の私にできる福祉は、何だろう。」と、考えました。よく分からないので、母に聞いてみました。母は、

「自分を大切にする。自分と同じように他人も大切にする気持ちを持つことが、福祉のスタートラインかな。」と、言いました。

他人の立場に立って、「今何ができるか」を考えながら、「私もできそうなこと。」から、やってみようと思います。

ポスター 佳作

日吉小学校 4年  
藤代 紗 矢



## 作文 佳作

南条小学校 5年

實川 幸希

『障害者と私の  
ひいばあちゃん』

私は、総合の時間に、車いす体験と目の不自由な人の体験と、耳の不自由な人の体験をしました。

車いすの体験は、実際に車いすに乗ってスロープをおりたり、段差をのぼってみたりしました。少しの段差でも、急に高くいすを上げられると、すぐおどろきました。また、ひとりでは、どうすることもできないことが、よくわかりました。病院や、歩道橋などに、スロープがついているのを、よく見かけます。スロープがあると、車いすの人たちや、お年よりにとっても、便利なんだと思いました。

目の不自由な人は、目が見えないので、文字や数字などが見えません。でも点字があるので、文字や数字がわかります。点字の本もあるので、読書することもできます。

点字は、エレベーターや、公衆電



話、階段などにもついていました。横断歩道の青信号の時に流れる音楽も、目の不自由な人のために考えられたものだと思います。

耳の不自由な人たちは、手話で話をする事ができます。私は手話を実際に教わってやってみました。見ていると簡単そうでしたが、やってみると、けっこうむずかしかったです。こんなむずかしい手話をどんどんできる人たちは、すごいと思いました。

そして、体の不自由な人たちのことを考えてみました。私のまわりには、いませんが、テレビで何度か見たことがあります。不自由な手に鉛筆をはさんで、文字を書いたり、はしを上手に使って、そばを食べている姿を見て、びっくりしたことをおぼえています。

両足がなくても、サッカーや登山を元気にしている人たちを見て、

どうしてこんなに元気に明るくしていただけるのだろうかと思ったこともありました。でも、その人達は、自分の障害を不自由とは思わず、一つの個性として、考えているということがわかりました。太っている、やせている、背が高い、低い、と同じように考えているというのです。

そう考えられる勇気がすばらしいと思います。

私の家のひいばあちゃんも、高齢です。昔は、田や畑でよく働き、何でも自分で作ったそうです。でも、だんだんと足や腰がいたくなり、今は耳も遠くなってしまいま

した。みんなのために、たくさん働き、今でも家族のためにがんばっている、ひいばあちゃん。私は、ひいばあちゃんと話す時は、耳のそばで大きな声で話したり、家の仕事を手伝います。大好きなひいばあちゃんに長生きしてもらいたいと思います。

人間は、だれでも年をとったり突然の事故やケガで手や足が不自由になったりするかもしれない。不自由な人たちを見たら、その人の気持ちになって、今何をしてあげたらよいかを考え、少しでも役に立つようになりたいと思います。

## ポスター 佳作

東陽小学校 5年

渡辺 育美



ポスター 佳作



大総小学校 5年

五木田 凌



ポスター 佳作

光中学校 2年  
市川 あずさ



作文 佳作

上堺小学校 6年

石橋 奈津美

『パトロール隊の方とのふれあい』

部活動が終わって帰るとき、いつもパトロール隊のおじいちゃんやおばあちゃんが私を待っていてくれます。

学校からの帰り道は、途中までは友達といっしょに帰るのですが、すぐに友達と分かれてしまい、私一人になってしまいます。あとは、パトロール隊の方と帰ります。最初はパトロール隊の方と話すこともなく、一人で帰っているような感じがしていました。

しばらくたったある日、その日は少し違いました。

最初二人のパトロール隊の方と帰っていましたが、一人の方は、途中で家に帰り、私ともう一人のパトロール隊のおばあちゃんと歩いていました。しばらくするとおばあちゃんが私に、

「お母さんに似てるね。」と、話しかけてきました。私はび



っくりしました。私はそのおばあちゃんがどこの人なのか知らないからです。

おばあちゃんはわたしにいろいろ質問をしてきました。

「大きくなったね五年生？」

「いいえ六年です。」

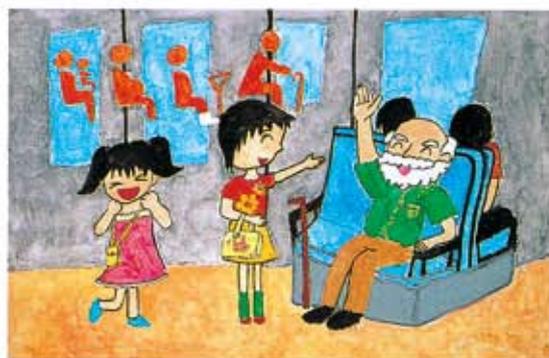
だんだん話しがもり上がってきました。そのおばあちゃんは、お母さんのお姉さんの友達のお母さんだそうなんです。そのおばあちゃんの名前を聞こうと思っていたのに、名前を聞くことができませんでした。

おばあちゃんと別れる時に、

「ありがとうございました。」と、大きな声でいきました。はじめてパトロール隊のおばあちゃんと話せて本当にうれしかったです。

今度、パトロール隊の方との交流会があるので、その時にはあの

ポスター 佳作



南条小学校 3年

関 かおり

おばあちゃんの名前を聞こうと思っています。

いつも私は、パトロール隊のおじいちゃん、おばあちゃんに見守られているんだということがだんだんわかってきました。

これからは、私がおじいちゃん、おばあちゃんたちに何かお返しができるといいなと考えています。